

鬪魚女靴

丹羽文雄文学全集 第二十卷

鬪魚・女靴

一九七六年四月八日 第一刷発行

著 者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二・郵便番号 一一二二
電話 東京〇三三九四五一一（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©丹羽文雄 一九七六年 Printed in Japan (文1)

目

次

女
商

289

愛
欲

233

女
靴

203

闘
魚

7

創作ノート	養豚場	ある青年の死	藤代大佐	砂地
387	371	355	321	311

装幀 辻村益朗

(一九六二年、羽用空港にて、長男
直樹の妻ベアテ・フライシャーと)

丹羽文雄文学全集 第二十卷

闘魚・女靴

閩

魚

出 会 い

夏の水は、解けやすい。すぐ、水が浮く。水が浮いては、すべり難かった。赤坂山王、Sホテルの地下室は、真夏というのに、零度の寒気がただよっていた。柔かに、レコードが鳴っていた。場内いっぱい、軽快にひろがるシュトラウスの曲だ。二、三十人のスケーターが、百坪足らずのアイス・スケート場を、黙々として、左回りに滑っていた。正面の、大きな柱鏡のまえを横切るときには、岩陰にかくれる小魚のように、気のきいた身振りになって見えた。

学生服が、多かった。たまたまの祝日を、学生にかえった気持で、ワイシャツ姿ですべている会社員もあった。まん中の広場には、緑色のスケート服の娘が三、四人、レコードに合わせて、フィギュアアの練習をやっていた。

髪かみの多い、比較的短い緑色のスカートの下から丸出しの、はち切れそうな健康な股が、可愛い顔立ちに気の毒な

くらい、まっ赤になっていた。氷のはるほどの寒さを、今更に思い出させるのである。

「びっ、びっ！」

と、笛を鳴らして、掃除夫がゆるくすべりながら、氷の上を三角形の棒状の箒ほうきで、解けた水をかき立て、押し集めていた。

「びっ、びっ！」

すべりおくれたスケーターは、うしろから迫る笛に、慌おどろててスピードを出した。

「宅うちつたら、そりゃへんですのよ。筆子しづこさんとは、まだ二、三度しか逢ってないのに、筆子さんと結婚する人はどんな人か、その方を是非自分は見ておきたいんですって……」

ふと、若い艶のある声が、起った。掃除夫が顔をあげると、一間ほど手前を、男一人女二人の組がゆるくすべっていった。

「まるで女みたいに、宅はあなたのことに拘泥こにっているんですわ。そんなの、おかしいでしょう？」

まん中の、喋しゃべっている女は、濃紺色のジョーゼットか何かの薄物で、五分も滑れば、骨の髄まで冷え上るにちがひなかった。子供を生んだことのある人妻か、身ごなしもぎごちなく、すべる足もとは心細かった。それを右側から、黄色のスウェーターの女が、抱きこむように支えて滑って

いた。青年は、何とも応えなかった。スウェーターの女性と顔見合わせて、微笑した。

「びッ！」と、鳴らしたいところであったが、掃除夫は、何か場所柄でないことを聞く思いから、鳴らすのをやめて、うしろから付いて滑っていった。

「宅はきつと、箒子さんみたいな方が、好きなんですわね」

あけすけにいう人妻は、いかにも好人物のようであった。

「ふふふ」と、スウェーターの女性が笑ったが、甘くうるんだ声だった。

他のスケーター達は、水すましのように掃除夫の左右を抜けて、気持よくすべっていたが、右側をすばやく滑り抜けた白皮の編上げのスケーターが、いきなり青年のうしろに迫った。

——危い、ぶつかる！

ひらりと、降ってわいたような人魚だった。白い手袋、水色のスケート服、寸分のすぎもない身ごしらえであった。口もとに微笑をうかべた、美しい女だった。そして、人魚らしい柔軟な衝動で、わざと、青年の背後にぶつかって。

青年は、ちょっとよろめいた。声を立てたり、咎めるひまもなかった。が、倒れないためには、その女と同じ速度

で滑り出すより他はなかった。否応なし、さらわれるように、青年は滑り出した。

薦^{せん}が獲物をさらう、あざやかさだった。

「だれ、あの女？」

咎め立てた人妻の声には、横暴なものに対する慍^いりが、はつきりとこもっていた。そのため、からだが棒立ちになった。

「ずいぶん失礼ね。あんなことされて、大丈夫、箒子さん？」

と、こわい顔になった。箒子と呼ばれる女性は、見送って、ぼかんとしていた。慍^いり出すことも、忘れていた。掃除夫も、つい手を休めた。

——ああ、あの女か。

すでに、掃除夫とは顔馴染^{かおなじみ}であった。週に一回は、スケート場に現れて、達者なすべり方を見せては男達を呆然^{ぼうぜん}とさせ、さっさと引きあげて行く、えたいの知れない女性だった。

その少しも人おじしない度胸には、呆れるばかりであった。二十二か三か、商売女^{しょうばいめ}にしては、女学生のように朗^{はげ}かであった。持物は贅沢^{ぜいたく}であり、まっ赤なドレスの時もあった。

「びッ、びッ！」

思ひ出して、掃除夫は笛を鳴らした。二人の女性は驚いて、身をさける拍子に、まわりの手摺りにつかまった。

「びッ、びッ！」と掃除夫は、はなれていった。

スピードが出ているので、青年をさらった水色の女が場内を一周してくるのは、ちょっとした間であった。何か喋りながら、女は青年の肩に手を置いていた。レコードに溶けこむような巧みな滑り方であった。そして、二人の女性のまえを通過する時には、女は無言で意味ありげな微笑を送った。

三度目に回ってきたとき、箒子はにっこりと笑って、応えた。

「知ってる方？」

と、訊かれて、

「ええ」

「それなら、なお失礼よ。何とか挨拶すべきでしょう。黙って、さらっていくなんて……」

人妻の方がぶりぶりしていた。二人は手摺りをつたって、出口に出た。そして、そこにある椅子に、崩れるように腰かけた。

「林さんよ、林ゆき乃さん。だけど、あなたは、ご存じないわね。クラスもちがっていたし、三年のとき、退学なすったから」

と、言訳のように箒子が言った。薄物の人妻は、しきり

と頸をかしげていたが、

「まるで記憶ないわ。おお、寒む！ かぜをひいたかも知れないわ。学校時代にすべったことなんか、すっかり忘れているわね」

スケート用の貨靴をぬいで、さっそく自分のサンダルにはきかえたが、とんとんと足踏みをして、からだにしみこんだ冷気を払い落そうとした。

「林さんて、だけど、ただ者じゃないわね。何してる方、奥さん？」

すべてしている二人の上に、痛いような腫をなげていた箒子は、

「芸妓さんよ。新橋の染葉さんて、あの方、とてもえらいのよ」と、その気もなく答えた。

「芸妓さん！」

青年をさらわれたときよりも、もっとびっくりした顔に、人妻はなった。が、それで、憚りのない声になると、

「驚いた、ハイカラね。芸妓さんだつて滑るのね。強敵じゃないの？ 小城さん、あの方ご存じ？」

と、おびやかすように言った。

「いえ」

「大丈夫？ 箒子さん、もっと慌てなくともいいの？」

と、顔をのぞきこんだ。困って、箒子は、両手で裸の腕を互に抱きすくめた。

すらりと伸びた、長身の腰をくねらせながら、

「箒子さんたら、あたしのこと、何とも話してなかったのね？」

と、からみつくような黒い瞳を小城の横顔に向けた。瞳毛のながい瞳だった。いたずらっぽい瞳である。

「それとも、あたしのこと話すの、いやだったのかしら」と、つけ加えた。小城は、何とも応えようがなかった。微笑をうかべて、つかず離れずに、氷の上をすべっていた。

「箒子さんの勤め先が、近いので、時々うちの近所で逢ってますのよ。逢えばきまって、あなたのことが出るの。そのくせ、あたし、一度もお目にかかってなかったのね。おかしいわ」

彼女は、しゃべり続けた。そして、角を切る時には、白皮編上げの左右の足で、倒れそうに傾きながら、巧みに向きをかえるのである。

「まあ、恐い顔、あたしの方をじっと睨んでるわ。あの奥さん、さっきから憤慨しつづけよ」

「蒔田夫人……？」

と、誘われて、小城も休憩室の蒔田夫人と箒子の方を眺めやった。が、遠くから咎め立てている蒔田夫人の顔付を、面白がるほど、小城もいつか横着になっていた。それ

には、スケートという速度のせいでも、もの感じ方も粗くなっていた。

「学校時代から、いやというほどあなたの噂は聞いてましたのよ。あんまり聞かされていたので、あなたという人を、とうから知っていたような錯覚に陥ちていたんだわ」遠慮したような、そのくせ、へんに隔てのとれた口調の使い方は、地についていた。少しもわざとらしくなかった。

——この女、いったい何をしているひとなのか。名乗りもしないで、十年も友達のように、いやに心やすい顔をして……？

何となく夢見心地といっても、誇張ではなかった。さらわれるように滑り出したときから、小城はこの未知の美しい女性から、不当に扱われている不安な気持であった。自分のことをくわしく知っている話し振りの、過分な、あまやかされている感じであった。が、肝心の自分は、この女性については何も知らないのである。不安な、また、何とも譬えようのない愉しさであった。

「ふふふ、とうとうお冠^{かんむり}よ。蒔田夫人、かえりかけてるわ」

女にしては大粒な、白い歯を見せて、笑い出した。

「あなたを無断で、さらってしまったので、きつと惱^{いら}つてるのよ。ふふふ、——お困りになる？」

と、顔をのぞきこんだ。

「寒くなつたんでしょ。 蔭田夫人薄いドレスだから、逃げ出すんですよ」

「だけど、筆子さんに慍られるんでなかったら、平気ね」

小城は、苦笑した。うっかり目を落すと、横に並んですべっている裸の股と膝頭が、寒さで赤くなっているの、小城は気まり悪くなった。目のやりどころが、なかった。

「明後日、土曜日でしょう？」

「ええ」

と、何気なく返事をする、

「四時頃、西銀座七丁目の河岸に近い『黒百合』という花屋に来て下さらない？」

ほとんど命令のように、そういうと、返事も聞かずに、スピードを出して小城からはなれていった。

そのまま手摺りにぶつかる勢いですべっていったが、出口の手摺りに両手をかけると、ほんと彼女は跳躍をした。男の子のように、身軽であった。筆子が迎えて、椅子をはなれた。

「お友達、かえつたようね。悪かったかしら」

染葉は椅子につくと、編上げの紐をほどきはじめたが、「おどかすつもりだったのよ。ごめんなさい。ちょっといたずらが過ぎたようね」

「そんなことないわ。 蔭田さん、寒気がするって。……無理ね、あんなドレスでは」

靴から目をはなすと、

「筆子さんも、ひどいわ。おどかすつもりで、あたしの方が、どきまぎしちゃったわ」

「どうして？」

「小城さんに、あたしのこと、何も話してなかったのね。あたしはまた、とうに通じていることと思つたのよ。あたしの方では、一ト目で、あなたの連れが小城さんだつてこと判つたんだけど、……それや大切な方だつてことは、十二分に承知してますけれど、ね……？」と、毒のない口調になつた。

「ごめんなさい」

すなおに謝りながらも、相手がまるで違つた世界の女性なので、話をする気がしなかったのだと、筆子は腹のなかで言訳をした。

染葉は笑いながら、更衣室にはいつていった。

「いったい何者？」

と、小城が更衣室の方を、顎の先で指した。

「本名は林ゆき乃さん、古くからのお友達よ。働いている婦人、芸妓さんよ。染葉さんて、新橋でも、いい姐さんですって……。さっそく、サービスして貰つてたわね」

「芸妓？ 道理で……」

紐がほどけたように、小城がにやにやと笑い出した。
「何かいわれたのね？」

油断ができないと、右手で小城の脇腹を小突いた。

「ううん、なに、いやに人みしりしない女だと感心してただけで、なるほどね、人みしりしてちゃ、お座敷がつとまらないね」

「学校時代から、運動好きだったわ。乗馬もするのよ。だけれど、まさかこんなところで逢おうとは思いがけなかったわ。スポーツ芸妓で通っているんですって。健康でしょう？ あれで、三味線が得意よ。英語も達者なのよ」
「どうして今まで、僕にあのひとのことを話してくれなかったの」

「興味がもてる？ へえ、あなたもやっぱりね。驚いた。

いえ、慌てなくちゃならないわ」

俄かに、両手で小城の腕を握^{にぎ}んで、ゆすぶった。

「何のこと、何を慌てる？」

「ううん、こちらのことよ」

そこへ、スケート用の靴、服などをしまいこんだポストン・バッグを下げて、染葉が現れた。スポーティな、純白のフェルト帽が、スーツによく似合っていた。こうした種類のひとの洋装は、いくら巧みに着こなしても、一ト目でお里が知れるものだが、判らない。一つ二つ若返って見えた。腕時計を見ながら、染葉は、

「これから帰って、お風呂にはいって、お化粧をすまして、夜になると、処女のごとく、しとやかな女に化けるのよ」

卑下した調子ではなく、化けることが如何にも愉しそであった。

「とても忙しそうね」

「これで両親をかかえているんですものね。商売大切よ。では、さようなら」

袍をふりふり、染葉は階段に通じる扉を勢いよく開けた。一度も、ふりかえらなかつた。まして小城には、目もくれなかつた。

「では、僕らもそろそろ帰るとしようか」

冷たくなった肌を、ワイシャツの上から叩くように撫でながら、小城はいった。そして、貸靴を脱いだ。耳の中には染葉の肉声のはつきりとのこっているのを感じた。

あれほど遠慮なく人の顔をみつめる癖も、職業柄と思えば、こたわる方がおかしかつたけれど、

——明後日の約束？

と、想えば、こっそりと拘泥りたいのである。しかし、この気持は、筆子にはあくまで秘密だと思った。

一階に通じる階段を、一步一步上ってゆくと、一ト足ごととに冬から夏に変わるようだった。空気の層が、段々に、そうなっていた。生温い温気が顔をなでると、今まで凍りつ

いていた毛穴が開いて、急に汗を誘い出した。

二人は、虎の門の方へ、街路樹の影をひろってあるいた。午後のおそい太陽が、特許局の屹立^{きりりつ}面に、かあつと鳴るようにあたっていた。並木の若葉があざやかなみどり色で、目にしみた。

笹子は大型の黒い靴をさげて、一方には、スケート靴をしまった安物のボストン・バッグを抱えるように持っていた。

「染葉さんて、僕のこと、いったい何を知ってるのかしら。君はふだん、僕のことをどういう風に喋^{しゃべ}ってるの？」

小城は、やはりそう口に出さずにはいられなかった。そして、ひそかにきまり悪がった。

「あんなの、みんな誇張よ」

と、笹子は汗のういている白い額を向けた。前髪が二、三本、汗にぬれて、肌^{はだ}にびたりとついていた。小鼻にも、汗をかいている。手をのばして、何気なく汗を拭^{ぬぐ}ってやりたくなるような、恰好のいい鼻であった。

「染葉さんて、いつもああした口のきき方をするのよ。本氣にとっちゃ、損するわ」

一重とも見える深い二重の瞳^{ひとみ}が、はずんだ睨^{にら}み方をしていたが、

「逢うたびに、あなたのことを何かと訊^きかれるんだけど、今日ぐらいのは、ああした世界の、外交辭令^{わいこうじりやう}でしょう。第

一、そうそうあなたのことって、お話しするたねがないわ」と、笑う。紅をつけていない薄桃色の唇^{くちびる}からもれる息は、いかにも香ばしいようであった。スケートのあとの、沸^わきたった健康な血液^{けつえき}が、ようやく沈んでいく気配であった。

小城は、紺の背広のボタンをきちんとかけていた。まっすぐに前方を眺めてあるいていたが、笹子のいい方が、何としても無念であった。

——いずれ、明後日になれば、判ることだ。

小城は、身だしなみのいい青年であった。いくらからお洒落^{お洒落}なくらいである。かったるい風な、大きな瞳^{ひとみ}をもっていた。

「さて、これからどうする。うちへかえる？ 仕事がある？ ……たまには、僕んとこへもおいでよ。近ごろは、いやに敬遠^{けいえん}してるみたいだよ」

と、話をかえた。首をすくめて、

「おばさん達と話してるの、窮屈^{きうくつ}なの。中学校の校長先生だなんて苦手だわ。俊紀^{とふき}さんは、今だって子供^{こども}みたい、両手^{りょうて}について、おやすみなさいというんじやないの？」

ついでに、小さい舌を出した。

「いいつけてやるぞ」

「いいわ」

地下鉄の入口が、そこに見えていた。